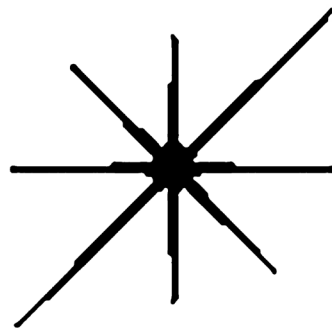


# コメット通信 3



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

燃えさかる空虚

——ロートレアモンを読むブランショ

石井洋二郎—————03

鹿島由紀子さんの句集『玫瑰』を読んで

森谷宇一—————05

研究？ 批評？ 妄想？ 学問？

——ひとりよがりの遍歴

高橋薫—————08

【連載】

唯一のバフチン自伝

——Books in Progress 3

板垣賢太—————11

キーファーからドナルドへ

——裸足で散歩 3

西澤栄美子—————12

# 燃えさかる空虚

——ロートレアモンを読むブランシヨ

石井洋二郎

『マルドロールの歌』を読むことは、ひとつの眩暈である。この眩暈は加速運動がもたらす効果に似ているのだが、それはちょうど、中心にいる読者を取り囲む炎の環が、燃えさかる空虚の、あるいは無力で暗い充溢の印象をもたらすようなものである——モーリス・ブランシヨの『ロートレアモンとサド』（1949）を初めて読んだとき、私はこの一節に文字通り痺れた。その意味するところが正確に理解できたわけではないが、とにかく、私自身のマルドロール経験をこれほどみごとに言語化した文章はないように思えたのである。

たまたま近所の古書店で毒々しい紫色の函に入った栗田勇訳の『マルドロールの歌』（現代思潮社）を手にとったのは、学園紛争の余燼くすぶる1970年のことだったから、もう半世紀前のことになる。大学の新生だった私は、じつはまだ作者の名前も知らず、何の予備知識もないままにこの本を開いてみたのだが、ページからたちのぼる瘴気にたちまちあてられてしまった。出会いがしらの事故にあったような気分で、何が起こったのかわからないまましばらく茫然と部屋の天井を見つめていたのを覚えている。そのときの経験は、まさに「眩暈」としか言いようのないものであった。

その後、紆余曲折を経てフランス文学の大学院に進んだ私は、修士論文のテーマにロートレアモンを選び、関連資料のリストを作成して手当たり次第に買い集めていった。この作家の研究史は、大まかに言って4段階に分けることができる。第1段階はシュルレアリストたちによる偶像崇拜的賛美の時代、第2段階はガストン・バシュラールを嚆矢とする主題論的読解の時代、第3段階は「テル・ケル」グループを中心とする科学的テキスト分析の時代、そして第4段階は肖像写真の発見に始まる伝記的実証研究の時代である。

ブランシヨの『ロートレアモンとサド』は第2段階を代表する画期的な評論であり、言うまでもなく必読文献の1冊である。著者は読書経験の加速運動がもたらす高揚感に身をゆだねつつも、およそ情緒的な熱狂や無条件の讃嘆に溺れることなく、さまざまな文学作品との関係を冷静に論じる一方で、凡庸な実証研究が陥りがちな「発想源の蜃気楼」を周到に回避し、あくまでもテキストにぴったり寄り添いながら、その内部構造や主題系を緻密に分析してみせる。その論証の明晰さと密度の高さは、初版の刊行から70年を経た現在でもまったく色あせていない。

眩暈の比喩とともにこの書物でもうひとつ印象深かったのは、『マルドロールの歌』を「時間の中で、時間とともに作られていく漸進的創造として、*work in progress* すなわち進行中の作品として読むことがきわめて重要である」という指摘である。作品を作者の署名と共に固定された完成品として受容するのではなく、現にいま、ここで書かれつつある運動体として経験するという発想は、のちのヌーヴェル・クリティックにも大きな影響を与えた視点であり、その意味でも本書の意義は計り知れない。

ところで私がこの本に出会ったときにはすでに邦訳が存在したので、当然参考までに目を通して見たが、率直に言って重大な誤訳が少なからずあるように見受けられた。このままでは「ブランシヨは難解」という先入観を植え付けてしまいかねない。もちろん、誤訳のない翻訳などほとんどありえないことはじゅうぶん承知しているし、私自身も恥ずかしい間違いを犯した経験は何度かあるので、人のことは言えたものではないのだが、それでもいつか自分の手でこの書物を訳してみたいという願望

はずっと抱いていた。

そしてこのたび、ふとしたことから積年の願いが叶えられることとなった。本書にはもうひとつの特権的な固有名詞であるサドについての論考も収められており、この取り合わせだけでも限りなく蠱惑的だ。今や古典となった感のあるこの書物ともう一度向き合い、ロートレアモンを読むブランショとともに「燃えさかる空虚」の只中に身を投じることは、この上なく贅沢な余生の愉しみとなるだろう。

執筆者について——

石井洋二郎(いしいうようじろう) 1951年生まれ。中部大学教授。専攻＝フランス文学。主な著書には、『ロートレアモン 越境と創造』(筑摩書房, 2008年), 『差異と欲望——ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』(藤原書店, 1993年), 主な訳書には、ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』〈1, 2〉(藤原書店, 1990年), などがある。小社刊行の著書、訳書には、『21世紀のリベラルアーツ』(編著, 近刊), モーリス・ブランショ『ロートレアモンとサド』(近刊) などがある。

## 鹿島由紀子さんの句集『玫瑰』を読んで

森谷宇一

鹿島由紀子さんは筆者の大学院時代の先輩であり、その後も、かなり長く続いた同人雑誌『エポス』で一緒させてもらった仲である。その『エポス』に彼女はいつからか短歌も精力的に載せるようになり、やがては歌集も次々と出して歌人としても認められるようになった次第である。そんな鹿島さんがこのたび初めての句集『玫瑰』（はまなす）を刊行した。「あとがき」によると、彼女の場合のように短歌から俳句へかその逆という、「創作軸の移行」はめずらしいことでもないらしい。

それはともかく、この書評を書くにあたり筆者は句集全体を一句ずついいねいに再読させてもらったが、正統的で滋味ある句が多いのにあらためて感銘を受けた。そのことはすでに冒頭の一句、

蠟梅の香り染み入る遺墨かな

から十二分に感じられるところである。あるいはもう一句だけ挙げるとすればやはり、句集の名前の由来ともなっている次の一句であろうか。

玫瑰や海風光夜は星

このように正統的で滋味ある句が多いのは、一般に俳句の鉄則とされる有季定型ということが守られているからだとまずはいえよう。しかしそもそも秀句を生むためには、有季定型ということは一応の必要条件にすぎず、ましてや十分条件ではない。そして逆に、句集全体を通じてみた場合、無季と思われる句も、「青空の物狂しきピカソ展」など十数句みられ、破調の句も、「五百萬本を離りて咲く曼珠沙華」など七、八句みられるのである。

こうしてみると、『玫瑰』の句風の核心は、抒情と造型とのバランスないし相乗効果にあるというべきであろう。すなわち心情の表出としての抒情が事物の描出としての造型を活性化するとともに、造型が抒情を下支えしているともいうべく、このあたりのことは先に挙げた代表的な二句にいかんなく示されている。しかし多くの場合にいっそう前面に出ているのは短歌とちがってやはり造型の側面であって、これを言い換えれば、いささか月並みな言い方ながらイメージの鮮やかさということになるが、ここでは一句挙げるにとどめておく。

夕闇をいずこへ大蛾白々と

さて『玫瑰』は12章に分けられているが、章別をとってテーマ（題材）の種別という点からみた場合、十分に多様な姿を呈している。そしてそれはおおむね自然詠と人事詠とに大別されようが、前者のほうが後者よりもはるかに多い。

自然詠のうちで第一は植物についての句、第二は動物についての句であって、前者は後者の二倍近くになるが、これは俳句の一般的傾向とかなり合致するものでなかろうか。いずれにせよ、これまで挙げてきた句もおおむね植物詠か動物詠であるので、ここではそれぞれ一句を追加するにとどめてお

くが、第二句と同様にかまきりを詠んだ句は一つの章を構成してもいる。

今日逢いし秋の草木を懐かしむ  
かまきりの押え込みたる夕の蟬

なお自然詠ということでは、作者の住まいに近い「手賀の里」（千葉県手賀沼の周辺）を詠んだ句は、二つの章を構成してかなりの分量になるが、しばしば植物詠ないし動物詠ともからんでおり、今しがた挙げた句のうちの前者もこれに属している。

次に人事詠のほうである。まず目につくのは父母や子といった近親者についての句であるが、これもしばしば植物詠、特に柿を詠んだ句とからんでいる。

父熟柿母干し柿を好みけり

大学院時代の師、すなわちフランス文学者・批評家の寺田透を詠んだ句も少なくとも三句あり、特に

北窓を開け迎えたる師なりき

は、筆者などにもしみじみと心にしみる句であった。自身の病気を詠んだ句もいくつかみられるが、概してあまり深刻ではなく、

病の字を忘れてをりぬ鯨日和

などは一種の軽みの境地とでもいえようか。しかしまた一転して心のひだや記憶、美術好きの作者らしく美術などもかなり詠み込まれており、東日本大震災を詠んだ十句あまりからは、「あとがき」の文章とともに、東北や三陸の地への思いが伝わってくる。そして、作者の専門であるロシアを詠んだ「白夜のロシア」の章ではしばしば、

猫柳ロシアの北の待つ心

のように、自然詠と人事詠とが渾然一体化している感がある。

最後に、俳句自体にとっては二次的なことであり、重箱の隅をほじくるようでもあるが、偏執好奇の身には小さからざる関心事である二点に簡単に触れておきたい。第一は仮名遣いの問題であって、『玫瑰』は文語体を基調としながら現代仮名遣いになっていることはともかく、「をり」とこの語だけは三回とも歴史的仮名遣いになっている。第二は文語文法上の問題であって、「自覚むかな」「ひとつ抑えり」「共に老う」などは明らかに誤りというべきであろう。

それにしても『玫瑰』は、現代俳句の巨星とされた金子兜太に代表されるような新鮮酷烈な俳句精神こそみられないものの、筆者のような並の俳句好きの渇きをも十二分に満たしてくれる豊かな泉水である。

執筆者について――

森谷宇一（もりたにうち） 1940年生まれ。大阪大学名誉教授。主な著書には、『文芸・演劇の諸相（芸術学フォーラム7）』（共著，勁草書房，1997年），主な訳書には，クインティリアヌス『弁論家の教育』（1～4）（共訳，京都大学学術出版会，2005-2016年）などがある。

# 研究？ 批評？ 妄想？ 学問？

—ひとりよがりの遍歴

高橋薫

わずかな方をのぞいて、「はじめまして」とご挨拶すべきでしょう。鈴木社主や編集者の方からは、自分の仕事の遍歴でいいから、というお話しで「それなら」とお願いしたのですが、凡人の人生遍歴を綴らせていただきます。わたしは2020年3月をもち、それまで勤めていた大学を退職いたしました。幸か不幸か学生時代、あるいは不貞腐れていた時期、肉体労働のアルバイトをして小遣いを稼いでいた僅かな期間をのぞいて、社会人経験がありません。そこで今回はわたしが過ごした教員の仕事のお話をさせていただきます。特別な方を別にすると、教員には基本的に二種類の義務が課せられます（「大学行政」を加える向きもいらっしゃいますが、これは義務だとは思いません）。つまり学生さん向きの授業と自分の学術的研究(?)です。「学術的研究」という語が偉ぶっていそうだったら、「妄想没入」でも結構です。どちらも同じ事態です。

そこで、ここでは敢えて「研究」という言葉を使わせていただきます。研究とは、自分が関心を寄せる（学生さんをよほどよく把握していない限り、指導教授や先輩の「これ、やってみたら」という言葉に添うのはあまり感心しません。あくまでもご自身の興味が第一だと思います）対象について頭をひねることであって、同じ関心領域を抱く別の方が、一定の前提に立ち、一定の手続きを追えば、どなたでもその成果に納得して貰える、そんな作業だと思います。「研究」や「学問」とはそれだけのことで、世のため人のために行なわれるものではありません。アインシュタインの相対性理論が人々の役に立ったでしょうか。知人の生物部員は京大に入学し、ゴキブリの研究を続け、ゴキブリ数十万匹を飼育した研究室に寝泊まりし、世界的に認められ、京大の名誉教授になりました。そうした研究も社会の発展を意識して果たされたでしょうか。一人の人間がそれだけの情念（怨念？）を傾け続けられたら、それは立派な「学問・研究」です。あくまでも私見ですが、現代の世界情勢がどうの、政治制度がこうの、とTVで講釈する人だけが学者とは限りません。およそ人間社会の役に立たない、数百億光年彼方の宇宙の姿を「妄想」するのも立派な研究です（というか、これこそいかにも「学問」ですね）。

脱線しましたが、わたしはネクラな少年時代を過ごしたので、ひとのこころの機微を映し出す文学の世界に嵌りました。ただ加藤典洋さんもいわれているのですが、当時の学問の主流だったテーマ批評とか構造分析（あるいはのちの生成批評）のような頭腦的なプレーよりも、そのひとの生き様に自分を重ねたかった。太宰治全集と（最初の）カフカ全集と、どちらを先に購入したか覚えていません。けれど太宰にしてもカフカにしても、キルケゴールにしても、感情移入の度が激しかった。好きすぎて、「分析」の対象になんてしたくなかった。二の矢に浮かんだのが、少し距離をおけるフランス文学で、当時は19世紀の異端詩人、ボードレールとランボーが学生の人気の的でした。水声社から出していただいたある本に記したように、20歳できっぱり詩の世界と手を切り、アラブの隊商となったランボーの潔さよりも、「この世の外ならどこへでも」と謳いながら、パリを離れるとすぐパリに戻りたがり、パリの中だけを40数回引っ越したボードレールのウジウジしたところが好きで、人間ボードレールの一番気になった点を卒論の題にしました。が、書きながら、「もしオレがボードレールだったら、100年後に恋人が何人いた、なんて調べられたくないだろうな」と妙に肩入れし、また



「一番気になった点」を書ききってしまったので、このような人格的な論評はやめよう、と思うにいたりしました。そこで大学院に運よく進学すると、今度はその当時の学生運動をおさらいしたい気分もあり、フランスの宗教戦争の時代を眺望しようと思立ちました。フランス16世紀というと、日本での人道主義の指導者、渡辺一夫が東大で教えていた時代です。東大とは縁もゆかりもなく、ガルガンチュワを面白いとも思わなかったし（年を重ねてもわかりませんでした）、また渡辺一夫の唱える「人道主義」とか「寛容」という錦の御旗を斜に見ていたのです、わたしはこの大先生の主張も研究も眼をとおさず、勝手に「血まみれの」フランス16世紀のテキストを読み始めました。当初は16世紀のテキストを文学作品として解説しようとしていました。でも環境も心性もまったく異なる16世紀人のテキストはどうも琴線に響いてきません。そこでわたしのいる20世紀ではなく、16世紀の人々はどのような暮らしをしていたか、そこを抑えないとまったくの時代錯誤になるのではないかと悟りました。「文学」は「生活・制度・思想（＝宗教）」の土台の上に立っています。わたしはそこで、勤務先からパリ大学文学部への在外研究を赦されている間、授業はそっちのけで、パリの古書店を足棒で歩き回り、例えばセーヌ河の土壌、パリの路地から、絶対王政（敢えて申し上げますが、国王が絶対権力を持つというのは大嘘です。これは単なる統治者の願望で、絶対的＝無拘束であったことはありません）以前の政治体制・社会体制の模様まで手を広げてしまいました。この作業を「ネオ・ランソニスム」と呼んでいます。「博士」号とは無縁でしたが、結果的に16世紀関係研究書・研究論文に「これはもっと掘り下げるべきだな」との感触は得られるようになりました。ここから「研究」をはじめられたらよかったです、人生の終点になってしまいました。わたしの経過報告は水声社さんのご好意で、幾冊かの本にいただいています。ご関心があれば（できれば表層的にではなく）ご覧いただければ幸いです。

大事な余談をひとつ。古文書の解釈をめぐる、授業で学んだ唯一、大事なことがあります。現在の若手の「研究者」の守備範囲に入っていないようなので申し上げます。「スクリーチ学説」です。スクリーチという人は英国人ですが、20世紀最大のフランス文学研究者の一人で、ある研究の影響を受け、「それを学説にまとめて揺籃期から17世紀あたりまで、同じ版でも同じ刊本になっているとは限らない」とした方です。当時の活版印刷は、後代のものとは違って、「一文字一文字活字の原型を選び一頁を作成していた」ため、うっかり（あるいは意図的に）、「n」の代わりに「m」を拾うこともあったからです。ですから本当はこの時代の同一とされる刊本でもすべて眼をとおさねばならない。もちろんこれは机上の理屈で、実際には膨大な文書が散逸しており、作者の文を反映した絶対的に正確なテキストなど、判断することは出来ません。しかし今現在のように、16世紀の文書が心無い電子テキストになり、「神聖」化されると、スクリーチ学説に触れたことがない「研究者」の「研究」にも眉に唾をつけたくなります。実証的な研究とは、ことほど左様に重要である、と考えるのは、老耄の妄言でしょうか。ちなみに17世紀終わりのピエール・ベールという大思想家は、情報の交換が難しかった時代ですから、借り出した文献出処には沈黙しても、所蔵書の引用時には「m. = mihi」（＝わたしの所蔵本では）と記しています。ベールが学者だった証拠です。わたしの駄弁はここまでにさせていただきます。

執筆者について——

高橋薫（たかはしかおる） 1950年生まれ。中央大学名誉教授。専攻＝フランス16世紀研究。小社刊行の主な著書には、[『〈フランス〉の誕生——16世紀における心性のありかた』](#)、[『フランス16世紀における抵抗の諸相——ドービニエからコキークへ』](#)、主な訳書には、ロレンツォ・パツラ [『コンスタンティヌスの「寄進状」を論ず』](#) などがある。

【連載】

## 唯一のバフチン自伝

—Books in Progress 3

板垣賢太

ミハイル・バフチンはポリフォニー論やカーニヴァル論で知られる 20 世紀ロシア最大の思想家のひとりですが、自伝や回想録というかたちで自分自身について書き遺すことはありませんでした。小社で刊行準備中の『バフチン、みずから語る』（佐々木寛訳）は、ロシアの文芸評論家V・ドゥヴァーキンが、晩年のバフチンの自宅を訪れて行なった非公式のインタビューの記録であり、自身の人生と同時代人について詳しく語った、対談形式ではあるものの、唯一のバフチン回想録と呼ぶるものです。

全6回にわたるインタビューでは、ロシア帝国の下での青年時代、ギムナジウムで受けた教育、ロシア革命の勃発、反革命の疑いで逮捕、カザフスタンへの流刑、流刑からの帰還についてが順に取り上げられます。新聞上での告発から逮捕にいたる経緯や、流刑先でどのように生活していたか、知人たちから受けた厚意など、詳細にわたる回想がなされるのですが、その合間に差しはさまれる、ロシア未来派やロシア象徴主義の作家をはじめとする、同時代の芸術家や文学者たちに関するエピソードがさらに興味深いものです。こうしたエピソードのなかで、バフチンはその人物の人となりを中心に描写し、また、芸術家としての力量に明確に判断を下します。例えば、初期ロシア象徴主義を代表する詩人メレジコフスキーとギッピウスを「溺死人のように青ざめてみすばらしい男」「すべてがこれ見よがしの虚飾」等と断じ、一方で作家ゴーリキーには、無定見さ、「独特の意志薄弱さ」があったとしつつも、人間としては度を越して善良な人だった、と評価しています（なお、バフチンが投獄された際にゴーリキーが当局に減刑の働きかけを行なったという事実が同時に明らかにされます）。

78歳を迎えたバフチンは、しばしば人名を思い出すのに苦労し、言い間違い、つかえながら回想を続けます。質問役のドゥヴァーキンとの会話がかみ合っていないように感じられることもあります。さらには、録音機材のトラブル、バフチンの飼い猫の乱入まで逐一記録されており、場の空気が臨場感あふれて伝わってきます。そのような本書は、バフチンの思想の背景の理解を深めるものであると同時に、動乱の時代に翻弄されつつも生きた、バフチンだけではない、20世紀ロシアの知識人たちの複数の生の姿をいきいきと浮かび上がらせます。

なお、ソビエト政権下ではロシア帝国時代のギムナジウムについて公に語ることはタブーであり、その他無数の理由でこのインタビューは公開不可能であろうものでした。本書のあちこちで、バフチンは「これは記録しないでほしいのですが……」と前置きしてから語りはじめます。そうした当局との緊張関係はおそらく言わずもがなのことで、バフチンの淡々とした語り口からは必ずしも読み取れないのですが、今回、訳者の佐々木先生によって詳細な訳注と解説が加えられ、日本の読者にとってもこうした前提、背景を理解しつつ読むことのできるものとなりそうです。

執筆者について—

板垣賢太（いたがきけんた） 1991年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

## キーファーからドナルドへ

——裸足で散歩 3

西澤栄美子

最近知り合った、若い映画ファンの友人と、お気に入りの映画俳優について話していて、邦画ではお互いに成田三樹夫<sup>(1)</sup>とわかった時、彼女に、「ドナルド・サザーランドはどうですか？」と尋ねられ、即座に意気投合しました。

日本版の『24』はこの秋放映が始まりましたが、アメリカ版の『24』の主演俳優で、アメリカはもとより日本でも人気となったキーファー・サザーランド(1966年～)は、ドナルドの息子で、筆者は、ちょうど歌舞伎ファンが当代の役者を語る時、先代、先々代を語らずにはいられないように、キーファーを(彼はドナルドより少し丸顔で、ずんぐりしていたので、ドナルドのような個性的な俳優にはならないとは思いましたが)気にかけていました。彼が少し有名になったのは『スタンド・バイ・ミー』(1988年)の不良グループのリーダー、エース役でしたが、その後、多くの二世俳優が出演した『ヤングガン』(1988年)のドク役で注目されました。

ドナルド・サザーランド(1935年～)は、最初はカナダ出身の、手足の長い、のっぽの青年でしたが、『マッシュ』(1970年)のホークアイは当たり役でした。『鷲は舞い下りた』、ベルナルド・ベルトルッチ<sup>(2)</sup>の『1900年』も1976年公開です(『1900年』の日本公開は1982年)。前者ではアイルランド独立派の(動物と意志の疎通ができる)工作員役で、この映画はチャーチル誘拐を企てるという(当然失敗しますが)、第二次世界大戦のドイツ側の工作員たちを主人公にした珍しい佳作です。後者はイタリア現代史の大河作品ともいべきもので、バート・ランカスター、ロバート・デ・ニーロ、ジェラルド・ドパルデュール、アリダ・ヴァリ、ドミニク・サンダ、ステファニア・サンドレリをはじめとする、伊・米・仏の俳優たちが共演した、ノーカット版5時間以上の大作です。ドナルドはこの作品でファシストの幹部としてのし上がってゆく青年を演じて強い印象を残しました。また、筆者にとっての彼の出演作ベストワン『フェリーニのカサノヴァ』もこの年の公開です。チネチッタのスタジオに作られたヴェネチアで、白塗りの化粧をした、フェリーニの述べる「空虚な肖像」としての彼の扮するカサノヴァは、女性の姿の自動人形と、無人の氷結したカナル・グランデで、回転し踊りながら闇へと消えてゆきます。

(1) 成田三樹夫とドナルド・サザーランドとの共通項は、bizarreあるいはoddな役も得意というところでしょうか。成田三樹夫は時代劇中心の俳優ではないので、彼についてはほんの少しの叙述があるのみですが、春日太一『時代劇入門』(2020年、角川新書)は、時代劇を知るための良い道案内です。同じ著者の『日本の戦争映画』(2020年、文春新書)は、日本の戦争についての論考の一つとしてもお勧めします。例によって強引な展開ですが、「散歩」に寄り道はつきものですし……。

(2) ベルナルド・ベルトルッチは、『ラスト・タンゴ・イン・パリ』(1972年)で断罪されていますが、私生活のスキャンダルによって非難されて、一部の作品が上映拒否になっているロマン・ポランスキーやウディ・アレンと同様、その全作品を否定することはできないのではないのでしょうか。

執筆者について——

西澤栄美子（にしざわえみこ） 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻＝美学，フランス文学。小社刊の主な著書には、『書物の迷宮』，主な訳書には，クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』（共訳），同『映画における意味作用に関する試論』（共訳）などがある。